

27B 日帰り旅行サークル 〈平成30年の活動〉

【平成30年11月1日】

幹事：第1班（牧野班長）

◆「奥胎内リゾート&乙宝寺を堪能する」 手作りの日帰り旅行

日帰り旅行サークルでは、平成30年11月1日（木）参加者14名（女性8名、男性6名）で第1班手作りの「奥胎内リゾート&乙宝寺を堪能する」日帰り旅行に行ってきました。V(^-^)^V

<旅程>

新潟駅(8:10)集合＝2番線「快速べにばな」(8:40 発)＝中条駅(9:23 着)＝<送迎バス>＝乙宝寺(写経、ガイド説明で境内散策、名物寺弁の昼食)＝乙まんじゅうや(買物)＝<マイクロバス>＝奥胎内ヒュッテ(紅葉リゾート散策)＝ロイヤル胎内パークホテル(カフェ&買物)＝中条駅(特急いなほ 17:31 発)＝新潟駅 18:01 着

【旅のお楽しみ】

- ♥「米粉」発祥の地「胎内」にて歴史と体験、食堪能の旅！
- ♥数々の伝説の名刹「乙宝寺」にて写経を体験し仏さまの教えを体感する！
- ♥幹事手作りの胎内名物お土産付！

秋の日帰り旅行は、幹事（第1班の橋本さん）が胎内市在住のことから、「地元の良さを見直そう！」ということで胎内市を舞台とした旅行を手作りで企画立案されました。

魅力いっぱいの秋の胎内リゾートを楽しんできましたよぉ～♥。

曇り空の新潟駅びゅうプラザ前に8:10に集合し、立体交差の工事で狭くなった2番線ホームに移動。ここは大変狭く、丁度ラッシュ時と重なり大変な混雑。新潟市市議会9月定例会で「混雑時に線路に転落する危険があるから安全対策に万全を期すよう」との一般質問があったくらいだ。

羽越線「快速べにばな」は、2両編成と聞き、果たして座れるか、持参したアルコールが無駄にならないかの瞬間だ。2番線に入ってきた列車は乗客のほとんどが降車し空車同然となった。これは嬉しい。

4人掛け座席に男性3人が集まったが、「紅」が居ないと寂しく石倉さんをお願いし華やいだ。乗車時間はわずか40分、慌てて飲み物、つまみが…、話は弾み、普段は静かであろう車内は賑やかに。この賑やかさに乗り合わせ客は驚いたのではなかろうか。グループ旅行と多少は大目に見て欲しい身勝手さがあつたが、周りのことも考えながら楽しみたいものと思った。

話しは弾み、あっという間に青空が覗く中条駅に着いた。

そこは昔のイメージの駅舎ではなく、今年7月に整備され、綺麗に様変わりした駅だった。

改札を出ると幹事の橋本さんが笑顔でお迎え（ようこそ胎内へ）、胎内地方に出ていた大雨警報を心配し傘を4～5本抱えていた（気配りが心に響いた）。



駅前に鎧をまとった美女の像が立っている。また、駅舎の壁面にも描かれている。弓を持つ美人像が妙に興味を引き、どうしても知りたいと思っていた。後で橋本さんからいただいたパンフレットを見て、以下の通り、よ〜く分かりましたよ。

坂額御前の像 ⇒



【坂額御前（はながくごぜん）について】

越後が生んだ弓の名手で日本の三大御前（巴御前、静御前）と呼ばれる。越後の大豪族「城氏」の姫君で、その館のあった奥山荘（現在の胎内市）に生まれ育った鎌倉時代の女武将。敵も絶賛するほどの弓の名手であったといわれている。城氏は源平の戦いで平氏方で戦い没落、1201年梶原景時が誅殺されると、その庇護下にあった城長茂は鎌倉幕府倒幕の兵をあげる。

幕府は佐々木盛綱らの討伐軍を送るが、鳥坂城に籠もった反乱軍に苦戦、その鳥坂城の戦いで活躍したのが城長茂の妹である坂額御前だ。最後は足を矢で射貫かれ生け捕りになり、鎌倉の將軍源義家のもとに連れて行かれ尋問されるが、その憶することの無い態度に惹かれた浅利与一という武将が妻としてめとり甲斐国で子をもうけ、その後は平穏な生涯を送ったという。

坂額は巴御前と並んで名をはせる人物とのことだが、県内でも坂額の知名度は低いですね。

中条駅で待っていた送迎バスに14名が乗り込み、乙宝寺を目指し出発。途中、車窓から美しい虹が見えた。お天気の回復を願っていただけにその美しさに一同童心のように感動。

【乙宝寺（おっぼうじ）】

我々一行を乗せた送迎バスは、乙宝寺の第2駐車場に到着。そこから「惣門」より境内へ。

乙宝寺は、新潟県胎内市乙にある真言宗智山派の寺院。天平8年（736年）聖武天皇の勅願を受けてこの地を訪れた行基菩薩とインドより渡来した僧婆羅門僧正の二人の高僧が、この地にパワーを感じたことでここを開山。婆羅門僧正は日本へ渡る前に、中国の「甲地」にお釈迦様の「右眼」をそしてこの地に「左眼」を納めた。そのため、この地を「乙地」とし、建立したお寺を『乙寺』と名付けた。その後、後白河院より、釈迦の眼を奉安する金の宝塔を賜りその時に「宝」という文字を与えられ、今の『乙宝寺』となった。

〔乙宝寺 惣門をバックに〕⇒



【「般若心経」(266字)の写経を体験】

普段は入ることの出来ない乙宝寺『本坊』に通された。
広い部屋には、既に写経の用意がされていた。
住職より写経にまつわるお話を拝聴後、いざ写経へ。
周りの筆ペンを走らせる音が気になり、まるで試験を
受けるがごとく神妙にスタート。

「般若心経」の巻末に願い事を記入するが「世界平和」や
「身体健全」などそれぞれの願いを記入し、書き終えた。

通常、50分程度で書き終えるところ、15分という超スピードで終えた方が…、「どうしてそんな早く!」と驚くばかりだ。

40分程度で皆さんは終わらせ、住職より「若い人と同じぐらいのスピードです」と言われた。
書き終えた写経は本堂に納めて願いをご本尊様に届けてくださるという。

写経後は新鮮な気分で境内へ。雨上がりの澄んだ空気の中、色付き始めた紅葉は日に映えとても
鮮やかだった。ここからは胎内市観光ボランティアガイドの久世氏より境内を案内していただいた。
久世氏は乙宝寺門前で1804年創業の「(有) 乙まんじゅうや」の11代目当主という。

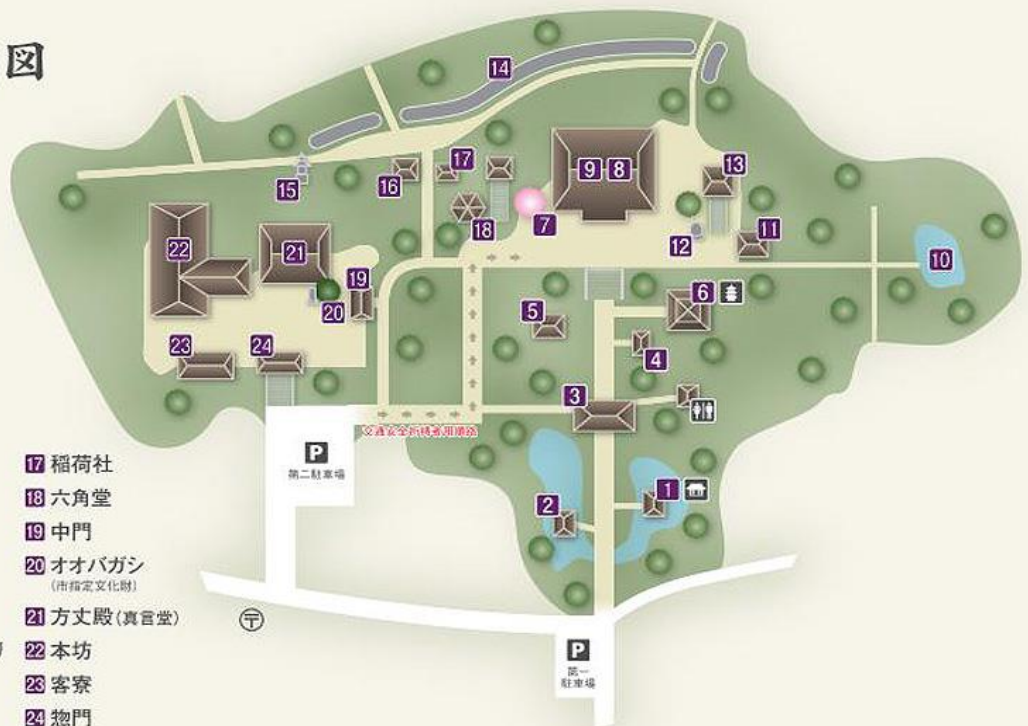


真言宗智山派 如意山 乙宝寺

境内案内図

- 1 弁天堂 (新潟県重要文化財)
- 2 金毘羅堂
- 3 仁王門
- 4 手水舎
- 5 鐘楼
- 6 三重塔 (国指定重要文化財)
- 7 きのと桜 (市指定文化財)
- 8 大日堂(金堂)
- 9 宝物殿
- 10 血の池
- 11 地藏堂
- 12 芭蕉句碑
- 13 観音堂
- 14 西国三十三観音巡り
- 15 猿塚
- 16 三宝荒神社

- 17 稲荷社
- 18 六角堂
- 19 中門
- 20 オオバガシ (市指定文化財)
- 21 方丈殿(真言堂)
- 22 本坊
- 23 客寮
- 24 惣門



乙宝寺の境内は2万5千坪あり、その他に15町歩の森林が囲んでいる。この広い境内には、国の重要文化財である『三重塔』や大日堂(本堂)、本坊、方丈殿、六角堂、弁天堂、観音堂、地藏堂が建つ新潟県屈指の古寺で、釈迦の左眼を納めたと伝える舍利塔など、寺にまつわる伝説や逸話が多く残されている。七堂伽藍の中心、金堂には胎蔵界大日如来、阿弥陀如来、薬師如来の三尊が当山の本尊として祀られている。

<三重塔>

国指定重要文化財。元和六年（1620年）、村上城主周防守忠勝公の寄進により建立された。純和様建築で柿葺きの線が美しく国の重要文化財に指定されている。



〔三重塔〕

<仁王門>

延享二年（1745年）に改修。奈良創建の金堂の古材が使用されている。仁王尊は行基菩薩の御作。また、山額「如意山」は洛東智積院第七世運徹の揮毫。

乙宝寺境内【弘法大師由来の「どっこん水」】

弘法大師が独鈷（とっこ）で清水を出したという独鈷水が境内にあり、当地では、なまって「どっこん水」と呼んでいる。飯豊連峰の伏流水が湧き水として出ており、年中水温が変わらない。新潟の名水100選に選ばれている。

約1時間の散策後は待ちに待った新潟日報に紹介（2018年9月10日掲載）された「寺弁」のランチタイムだ。

【寺弁】

寺弁とは、魚や肉は使わず、どっこん水の地『乙』地区で育った野菜をふんだんに使った精進風のお弁当。胎内市乙地区の有志が、乙地区に伝わる「茶めし（シソご飯）」を中心に地場野菜（素材）にこだわった弁当を考え出した。地区の名刹（めいさつ）乙宝寺が監修し、同寺で食べられることから「寺弁」と名付けられた。



〔野菜をふんだんに使った料理が並んだ「寺弁」〕↑

この「寺弁」を普段は参拝者が入る事のできない乙宝寺「本坊」でいただいた。

程よい量で大半の方は完食。寺弁に「乙まんじゅうや」から提供のあった酒饅頭1個が添えられていた。揚げ饅頭とともに注文の受付があり、多くの方が購入。

※「シソご飯」とは乾燥させたシソの葉を煮出した水でコメを炊いたご飯のこと

【乙（きのと）まんじゅう】

胎内市特産で、粃と餅米を使った芳醇な吟醸酒のような風味のある皮が特徴。保存料や添加物などの余計なものは一切使用せず、もち米に粃を混ぜて発酵させた生地、職人たちの経験と感覚を結集し、「ふっくら、もっちりとした酸味のある皮」が作られているのだ。



昼食後は「乙まんじゅうや」に寄りお土産タイム。

【(有) 乙まんじゅうや】

乙宝寺門前に店を構える1804年創業の老舗「乙まんじゅうや」。
ここの名物「乙まんじゅう（酒饅頭）」は越後三大酒饅頭のひとつに数えられ、その製法は創業時に当時の住職より初代が習ったものという。

〔米粉揚げまんじゅう〕

乙まんじゅうに米粉をまぶし、これまた米粉で出来たパン粉を付けてカリッと揚げた『米粉揚げまんじゅう』も提供。外はカリカリ、中は乙まんじゅう本来のモチリ感が特徴。



〔(有)乙まんじゅうや店舗外観〕



〔米粉揚げまんじゅう〕

お土産調達後は、もう一つのメインである奥胎内リゾート観光です。
マイクロバスに揺れること40分、飯豊連峰（磐梯朝日国立公園）の登山口に位置する「奥胎内ヒュッテ」に到着。

【奥胎内ヒュッテ（ロイヤル胎内パークホテル系列）】

飯豊連峰（磐梯朝日国立公園）の登山口に位置する、正に大自然の中の「奥胎内ヒュッテ」。
手つかずの自然が残る胎内川上流の胎内溪谷。ブナ林に囲まれたヨーロッパなプチホテルは、紅葉の美しいスポットとしても親しまれている。奥胎内ヒュッテは、そんな大自然の中にある。

奥胎内では多種多様な動植物を見ることができるが、特に野鳥は、幻の「アカショウビン」が見られることで有名。毎年多くの野鳥愛好家が訪れる全国有数のバードウォッチングエリアとなっている。
レストラン「アカショウビン」でティータイム。奥胎内の自然を心ゆくまで堪能し、素敵な秋の思い出となった。



〔レストラン「アカショウビン」から臨む胎内溪谷の絶景〕



奥胎内の自然を心ゆくまで堪能した後は、来た道に戻り「ロイヤル胎内パークホテル」へ向かう。

【ロイヤル胎内パークホテル】

この外観は、しばしばヨーロッパの古城に例えられる。静かで美しい森の中、眼前に湖のような水面がひろがる小高い斜面に建つ威風堂々とした佇まいを目にしたとき、異国にきたかのような錯覚を覚える。この建物の開放感あふれるロビー、そしてエレガントなエントランスの空間にうっとり。美肌効果のあるトロッとしたお湯が魅力の新胎内温泉。露天風呂で時間を忘れて泊まりたいものだ。



〔ロイヤル胎内パークホテルの外観〕



〔お楽しみお土産抽選会の模様〕

ホテルでは、橋本幹事が用意した「お楽しみお土産抽選会」が行われた。お土産には、胎内ジャージ乳製品、黒豚ハム製品、坂井の神楽米、胎内高原ビール、胎内高原の水(豊かなミネラル成分を含んだ飯豊連峰の伏流水)など胎内の特産品の数々。抽選の都度、歓声があがり、お目当ての品が当たると雄叫び、外れては落胆落涙の悲鳴と盛り上がったお土産タイムでした。ここでは胎内発祥の米粉を使用したもちもちパンを販売している。

【米粉のまち胎内市】

胎内市は米粉発祥の地。日本で初めて米粉製粉工場が建設され米粉の品質は日本一を誇る。米粉の普及に力を入れており、米粉を使ったパンやお菓子のお店が数多くある。

ホテルで休憩を取った後は、送迎バスで帰路へ。中条駅前で幹事の橋本さんと名残惜しくお別れ。とても行き届いたおもてなしの旅程と心配りに感謝し駅舎へ。JRは久しぶりという方が多く、券売機の切符の買い方がよく分からない。「スイカ」だけでは特急に乗れず別途「特急券」が必要なことが分かった(そだね)。羽越線経由の方と別れ、11名は「特急いなほ12号」に乗り新潟駅へ。そして新潟駅で下車したうち9名は、すっかり恒例となったハンバヌギで反省会です。

秋の旅行は「美しい自然と豊かな文化に育まれた胎内」でした。

第1班の橋本 邦昭&橋本 節子さんの手作りの「魅力いっぱいの秋の胎内リゾート」を堪能。素晴らしい日帰り旅行でした。初めての手作り企画旅行でしたが、14名と多くの会員が参加し楽しく充実した一日を過ごさせていただきました。

往路の列車の中では、スーパーの袋から中々出せない酒に悪戦苦戦したり、ツマミのソーセージの袋が切れず歯でちぎったり、いろいろ焦りの場面などがあった一日でしたが、どれもこれも良き旅の思い出となりました。これだから「日帰り旅行はやめられない!!」。

幹事の第1班の皆さま（特に橋本 邦昭&橋本 節子さん）ありがとうございました。
そして参加いただいた会員の皆さんお疲れ様でした♥。

今回は、第4班（秋山班長）幹事の「春の旅行」（4月～6月頃）を楽しみにしています。
その前に、新年会（幹事：第3班 金子班長）兼総会（新年会と同時開催、幹事：佐藤会長）が
開催されるので、また大勢の皆さまのご参加をお待ち致しております。

それまで、ご機嫌よう ♥ (^_^)/~。

以上

<追申>

日帰り旅行会員 田口 澄治さんの「30方陣」紹介

日帰り旅行サークル会員で、平成27年新潟2B同窓の田口澄治氏より、シニアカレッジ開学
30周年を記念し、「魔法陣」で「30方陣」を創作いただきました。

平成30年12月19日の記念式典の際、紹介ブースを設け、ご希望の方に贈呈される予定です。

また、ご希望の方には、解説の冊子をお送りしますので、ハガキでお申込みくださいとのこと。

但し、先着200部とのことなのでお早目に下記までお申込みください。

【お申込先】〒950-2002 新潟市西区青山6-16-13 田口 澄治 宛

※魔法陣とは

1から始まる連続した異なる数字を、正方形の中に整然と並べ、各行各列および両対角線上の
数の輪が等しくなるようにしたものです。完成した図は、堅苦しい数字に整列の美さえ感じられ
ることから、妖しい「魔」を冠し「魔法陣」と称したものと推測できます。

（田口澄治著「魔法陣の易しい解き方」より抜粋）